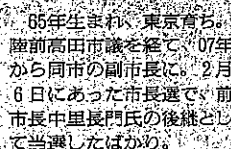


住民で声かけのさなかに波
税の優遇策や特例求めたい



戸羽 太さん

「どういふものも大切なんです
が、「最悪でこれなんだ」と言
われてしまうと、それが頭に入
っている人たちはそのエリアか
ら抜ければ大丈夫だと思ってしま
う。今回はその区域を越えて水
が襲ってききました。情報は欲し

「えんおはあちゃんにも声をかけるとか、ルールが決まっています。今回はそれをやっています。今度はそれが来ても、間に津波が来て、多くの命が失われたというふうもある。」

「でも、それが悪いんじやない。自分の命が大事だからと若い人たちが勝手に逃げて、高橋

「私が頑張らなければ、市民もついでにさすから、被災地にはガソリンと軽油、灯油が絶対的に足りません。政府は何をやっているんだと。もう、一刻も早く帰って欲しい。」「何に一番困っているの」といふことを考えてもらいた。

この街は、一番被災してしまった地区に商店や会社があった。国の緊急雇用対策なども使いつながら、最低限市民が生活をしていけるように考えなければいけない。

これから税収がゼロみたいになるなかで、市の復旧のために

だが、いくつかの選択肢があるなかで、市民が一番せに近づける選択をしなければならぬ。選挙で負けることにならうとでも、市長として、きちんとした選択をしなければならぬ。結果、あの選択は正しかった。

えてみんな頑張つてきました。私たちも力を合わせて頑張つていきたい。災害はひとごとじゃない。日ごろから、被害に遭わないようみなさんにも心がけたい。欲しい。こういう悲しいことは、うちだけで十分です。

(聞き手：森本末紀、井上裕二)

守らなければいけない
 その上で、住んでいる人の安全
 防災組織をつくってました。
 津波がきたらどう行動するか、
 どこに逃げるか、隣のおじいちゃん

先月、私にとつて初めての市長選があらたばかりですが、その選挙を手伝つてくれたのは妻でした。津波で、多くの人が亡くなつた。市の職員や、その家族も亡くなつた。つらいのは私だけではない。いま、市長の仕事を一生懸命やらないといけな

証明書が必要ですよ。それに応えるのも仕事ですから、国や県の方を借りながら立ち上げていきたい。

いつになるかわかりませんが、これからある程度平穏になったら、どこで仕事をしたいのかという問題も出てくる。我々たちは

も、たとへば総務課が忙しいから、人口が減少すれば、経済力ではその下に下つていく。私一人が、広域合併も視野に入れないで、決めることはありません。けれどもいいない。地域の人は合併を非常に嫌がる。私の選挙でも、合併だけは絶対にしないで

災などいろいろな苦勞、苦難を被る。日本人は原爆や阪神淡路大震災

どうしてこれが分らないと、どういふ大惨事になってしまう。陸前高田市では、高し約6メートルの防潮堤があります。今回、津波は、その上を越えまして、では、防潮堤が10メートル以上あればいいのかと言えは、刑務所の扉じゃないんですから。景観

それからすぐ後に自宅があり、「逃げていければいいな」一生不安に居っていました。翌日、すれ違った知人に、小学4年、6年の息子と人が無事だったと聞かれました。妻については話してもらえず、神妙な面持ちでした。"I'm not saying"

被災当初はそれぞれの家に食料の蓄えがありましたが、一週間経ってなくなってきた。避難所に食料を求めて来る人が増えている。当初考えていた以上に食料が不足しています。

市役所の機能も並行して立ち上げなければなりません。年度

族を亡くした人がいる。そういう人たちが、何がなんでもこの地域に住みたいとかいえば、そういう心境ではないかもしれない。ゼロじゃない、マイナス100となった陸前高田市から出ていく人がどれだけいるのか分からない。

心配はないわけですから、みんなもそういう方向で考えるんじゃないでしょうか。

市長就任から1カ月たたたにうちに震災に遭いました。市庁の皆さんに励まされています。避難所を回って声をかけ、励まそうとして、妻の安否不明を

波に

「正しいのかは誰にもわからない
んが、私の妻も何方か分かっていま
せん。地域で集まるまでしてい
るうちに、津波にあつてしまっ
たようです。私は職員として
市役所の最上になり、きりきり
と逃げました。」

ものがなぐ、捜しにいけない悔し
さ、ただただ暗い中で時間が過
ぎていく感じが、すごくむなし
いものを感じた。悔しい。今は
後先考えずに燃料を出す、その
う判断が国は二歩も三歩も遅
物質もまたまだ足りません。

い、仕事もない人にもっと税金をよそせと言つのはいじめになる。例えば、8年間の税の修通措置とか、国や県に特例を認めて、ものすごく安くしても構えない。

■ ■

あれだけ布い思ひをして、家

建てようと思ふ人はまうないでしよう。10年、15年たつて、悲しみが心の中から薄れていつたときには、そういう人もでてくるのかも知れない。私自身も子どもを連れて元あつたところへ再び家を建てようとは思わな

宮城県南三陸町長

佐藤 仁さん

地震が起きたときは、議会中
でした。閉会のあいだで、数
日前に起きた地震を挙げ、これ
まで以上に災害に強い町づくり
をしましょーと話してつたん
です。

すぐ、役場の隣にある、階建
での防災対策庁舎に移動しまし
た。震度6弱と確認して間もな
く、大津波警報が発令され、生
後9時に6時の津波が来るとい
報が入りました。津波の到達ま
で、残り10分ほど。高台に避難
するよう、防災無線を通じて町
民に知らされました。

屋上につながり、海を見ましょ

屋上には30人前後がいました。津波で一気には飛ばされました。私は屋上の外付け階段のところに飛ばされ、階段の手すりにはがみつきました。3分くらいは頭の上を波が超えていたと思います。2、3秒おきに頭が水の上に出る。その間に息をつ

とがわかつたんです。
この服は、あの日、津波をかぶったときに着ていた服なんです。着たきりです。めで、着替えがないんですよ。

今回の津波被害は、町の防災計画をはるかに上回るものでした。計画は（町の志津川地区で

へ物があつたので、遊樂所へ来る人もいます。遊樂所生活を営む人たけでなく、町民全員が遊樂所民だと思つてゐます。そういう捉え方をしないと、物資と配給の仕方が偏つてしまいます。ありがたいのは、遊樂所ごとに自治組織が出来て、その自治

「この住居がどうかという心の問題は、わたがずでは済まじょうもないところがあります。」

「近所の地盤が沈下しているという話も聞きました。これからの町のグラウンドデザインに取り組む外にないといけません。」

「まず現状を把握しないと描けま

お願いしたいのは、被災した人が自宅を再建する際の融資です。仙合あたりでアパートに入居して家賃を払ったほうが楽だといふことではなく、町内に家を建てた方が良いといふことを打ち出さないと、町外に人が出て行ってしまふ。

起きってしまったことはしょうがない。この現場からは逃れられませんが、後ろは向きたくない。私が前を見なかったら、町民のみなさんも前を見られない。前を見るしかないんです。

（聞き手・篠建一郎）

た。まずは水ではなく、真つ黄色の土煙がバーツと舞い上がったんです。その後を追っかけて波が来る。高さ8メートルもある防潮水門よりほかに高い波が、とんでもない速さで来た。津波は家を次々になぎ倒し、す

波が収まってきた。ライターでネクタイや流木を燃やして、一晩過ごしました。翌朝、雪がかなりほろろ相模川になった。防災倉庫を、庁倉に格まうた。漁網のロープで下まで降り、近くの小学校に向かいました。そこ

歴の方にも買物で利用者が、

が帰って来なければ、町としての機能は成り立ちません。

でも、町には高齢者が多く、金をかけて新たに家を建てるのが苦しいのか、どうにかする必要があります。道路や建物、インフラなどハードの部分は税金でまかなわれます。でも、こ

ここではきていません。いつまでも避難所で生活している上万人弱の人たちを抱えているのです。先に向かって進むことはできません。職員が36人も行方不明という状況もあり、前に向かって考えていく時間がないんです。

が、我々にとって一番ありがた
いことです。

約50年前にナリ地震津波の被
害を受けてから、町づくりを進
めてきました。県の観光キヤン
ペーンで一番、という評価を受
けたこともある。それが一瞬に
て覆滅してしまった。当面は

波が引いたときに残っていたのは、10人だけだった。第2波からは崖上にはびたタヌキとタヌキなで屋上に立っているアンテナに登りまじした。全身ずぶぬれで吹雪だったのだから寒かった。

いま町の人口の約半分の一
万人弱が避難所生活を送って、毎日増えている。全国のみなさんの支援にも、各地に感謝したい。涙が出る。見知らずの町にたくさんのお支拂物を送ってやりがいはある。でも、それじいじにはありません。

た。町の再生は大変難しい。例えば、津波で倒壊した役場をここに建てるのかという問題があります。山を削って高台に造れば安心かという町民もいますが、あの津波に流された更地をどうするのか。もう一度道路を造り、区画整理をして建物

います。基本的に移住の選択肢は町民にありますが、我々としても疎開について前向きに取り組まざるを得ないというのが現状です。

業の方々も仕事の場所がなくなつてしまつた。貯金がある人は、何とかなるかもしれないけど、この状況下でしのげる人は、もう多くはないと思ひます。

我々は長丁場でやつてゐるかなといひませんが、町だけではどうしようもない問題です。繼

4人の死者を出した。1960年のチリ地震津波を今もくもくして思いまう。

宮城東沖地震が起きたときに、起震点の津波の予測値は6.5だったのだ。でも、実際に観測された津波の高さは、思っていたよりも低く、津波が来るなんてことは、一人として思っていない人がいた。

す。それにリーダーがいる。一日の行動を決めて活動している。自分たちで炊飯をするというところもあります。これなどはどうもありません。これに比べて、住居主体では、町づくりを怠ってきたので、そういう人たちがうまくやってこれています。我々はそのサポート役です。

町外、県外へ出ようという町民も出てくると思ひます。村井嘉清、宮城県知事が県民を他県に一時的に疎開させることを検討している」と表明しましたが、実は町にも、友好町である山形県庄内町から、疎開を希望する人を受け入れるという話がきて

仕組みをつくってもらえないだ
ろうか。そうでなければ、町と
して本当に危機的な問題になり
ます。

そして、現実問題としては収
入がないことがあります。会社
勤めの人には、仕事場が荒れてし
まっています。自営業、漁業、農